山地中將の肖像附錄

過般讀者の授受多數により本紙の石版附錄と定りたる山地中將の肖像は彌々明後二十日の本紙に添へて讀者に配布すべし

當日の時事新報は臨時紙數を增刊するを以て印刷上多くの時間を要すれば同日の紙上に掲載する廣告は今十八日中に本社へ申込みあるべし

時事新報

在外日本人に關する報告

海外に在留する本邦人の中には兎角無職業の破落戸の類多くして其風體擧動如何にも見苦しく本國日本の名譽を毀損するみと少からざるを以て何とか方法を設けて斯る醜汚の人物をば一切外出せしめざるみとにす可しとの說は近來甚だ勢を得て此一事に就ては世間別に異論を唱ふる者なきが如しと雖ども我輩は何分にも此說に贊成する能はず其次第は每度時事新報紙上に陳べたるみともあれば讀者の既に了知する所ならん

然るに爰に又我輩が敢て世の論者の一考を煩はさんとする所のものあり即ち「在外日本人中には無頼漢甚だ多し」との說は果して眞の事實あるや否やの一事なり今日海外旅行境遇の必要を說く者は無論これを事實なりとして更に疑を容れざる者の如しと雖も我輩は此點に就て大に審かあり能はず抑も在外日本人に關する右の如き面白からざる報告は如何なる處より發する哉其源を尋ねるに皆是れ親から外國に在て實際の有樣を目擊したりと稱する日本人の云ふ所を傳へ又傳へて次第に世間一般の評判を成すものにして親から實際の有樣を目擊したる者の所見と云へば誠に間遠おき話の樣に聞はるれども其實は必ずしも然らざるもの多し凡そ何事にもあれ人間社會の現象に就て正當ある判斷を下さんとする者は先づ百般の感情を脫却して虛心平氣に利害の大小輕重を量り冷淡なる數理を根據にして說を立ること非ざれば甚だしき誤謬に陷ること多きを常とす學者の實に注意す可き所のものなり今我國人がたまく海外に在て同國人中に破廉耻、不品行の者あるを聞見し斯の如き無頼漢を海外に置て西洋人の目に觸れしむは國の恥辱なり日本人の面目を害するものなり遠に本國に送還さゝる可からずとて熱心嘆々する其大原因は即ち斯の如き人物を以て我同國人なりと言唯されては已等が西洋人に對して外聞悪しと云必一時の感情に過ぎざるものと認めて大なる間違はなかる可し人生に死かれ難きことあれども既に感情に制せられたるものとすれば其誠く所に偏頗なからんと欲するも得べからず例へば爰に百人の夢位者ありて其中に十人の無頼漢ありと假定すれば其十人の所行の爲めに他の九十人の者までも皆惡名を附せらるゝみとなるを期す可らざ何とおれば無頼漢の醜狀は人目に觸れ易くして正業者の美實は容易に認め得べからざればなり左れば在外日本人の擧行に關する報告は多くは醜中の醜を拔きたる事實にして之を總體に平均すれば針小を棒大に說くも可なるよりも不可なるが如し

[illegible]の報告書の如きに至ては此弊最も多かるべしとも稱すべき看據にて在留日本人の少しく思慮ある者は先づ差向き領事館に行て救護を求むるの習慣にて臨元より資金到着せずと云ては領事館に行き、借金を返すに金を整まれたりと云ては領事館に行き、病中と能はずと云ては領事館に行き、下宿屋の勘定に差支へると云ては國事館に行き、喧嘩の始末博奕の差縺より有るとあらゆる不幸不運不始末不行狀の其最後の處置に當惑すれば即ち領事館の厄介とあるの定おれば在留人の稍多き土地にては領事館の繁雜一通あらずして門前常に市を成す其群集は都て是れ醜物の群のみ之に反して正當の職業に就き衣食に差支なくして獨立の生計を營み漸く資產を成す者の如きは其數少あからざるも國より領事館あるに用事のある可きにあらざれば曾て顏を出したるみとなきが故に在館吏人の眼は唯同國人の醜を見るのみにして曾て其美を見ず本國政府に贈る報告の醜ある亦謂れあきにあらざるあり之を喩へば醫者が日々病人のみに接して滿天下皆病人ならんと想傷するものに異ならず在外の日本人中醜者國より少あからずと雖も其裏面には正業の美者も亦甚だ多し醜美混合は獨り日本社會に限らず世界萬國の普通にして純美を求めんとするも人力の及ぶ所にあらざれば我國人も須らく其醜を大にして在外人の報告あるに驚駭せらるゝみとなく寧ろ外國に行かんとする者あらば之を誰何せずして醜美混合のまゝ其行く所に行かしむ可し況んや衣食足りて禮儀興るの古言典あらんには彼の醜者も海外に衣食を得るに從ひ醜を脫して美に入るみともある可きに於てをや我輩は唯此一事に付き我官民の大膽あらんみとを祈るのみ

官報

○陸軍省告示第九號

維新前後殉難者贈宮藩小山剛介以下左記ノ千二百七十七名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來十一月五日同社ニ於テ招魂式翌六日例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラル

（姓名表略ス）

明治二十四年九月十七日

陸軍大臣子爵高島鞆之助

○逓信省告示第二百七號

朝鮮國仁川郵便局京城出張所ニ於テ郵便爲替及貯金事務ヲ開設ヲ來ル十一月一日ヨリ其事務ヲ取扱ハシム

明治二十四年九月十七日

逓信大臣伯爵後藤象二郎

雜報

○聯合峡の機樣　愛知縣の內藤魯一氏が近頃上京して自由黨と自由倶樂部との聯合を計らんと盡力居る事は既に本紙にも見えしが近來の機樣ありと云ふを聞くに今日迄和睦したる自由黨員等は內藤氏の意見を贊成して偏に聯合の成就せん事を希望するものゝ如し本來內藤氏が此聯合を計らんとしたるは敢て今日に始りたるに非ずして本年三月頃自由倶樂部の自由黨を脫して一派を爲したるより夙に其志ありたるも當時分離の際あれば雙方の感情も激昂し屈りて折角の心配も無動に歸するを氣遣ひ遲延して今日に至りしかど迫々聯合問題の發の期も差迫り大に聯合の必要を唱する機運に遭遇したれば此際聯合の相談を極むるに如かずとて偖てみる內藤氏が上京したるなり但し自由黨中にても其最も親しき藤桐の意見を叩き然る後追々全體の意成を得んとの諸氏も始めとして同意を表したる者少からざるに付き欲し先づ十數名の人々に相談せし處板田、河嶋、大井等の間に定期就海を開くに至るべしと云へり

○西伯利亞鐵道工事の機樣　此程米國の一士官よりコロニクル新聞通信者に送達工事の機樣なりと云ふを聞くに「ヨーヴスキに至る六百哩の間には今支那人を使役し工事中にて四年間に副して目下アムール及ウスリ河より五千哩の一大幹線にも着手せり」とは實にセントピータースバルグよりの報告あり此幹線は十年間に落成の約束なれば從て急設工事も容易に進捗すべし而して此幹線は從て急設工事も容易に進捗すべ